

〈幼稚園 健康〉

自ら体を動かすことを楽しむ幼児の育成

— ボール遊びを通して —



浦添市立 仲西幼稚園 大城 美奈子



目 次



I	テーマ設定理由	1
II	目指す幼児像	2
III	研究の目標	2
IV	研究仮説	2
1	基本仮説	2
2	作業仮説	2
V	研究構想図	2
VI	研究内容	3
1	幼児期の運動について	3
2	ボールの特性とボール遊びの意義	4
3	ボール遊びの展開の留意点	6
4	本学級の幼児の運動能力実態調査	7
5	ボール遊びを通して育みたい姿	8
6	5歳児におけるボール遊びに関する年間指導計画	9
VII	保育実践	11
1	題材名	11
2	ねらい	11
3	題材について	11
4	検証保育の全体計画	11
5	本時までの遊びの様子	13
6	検証保育（本時）	13
7	本時後の遊びの様子	17
VIII	研究の考察	17
1	作業仮説(1)の検証	17
2	作業仮説(2)の検証	20
3	本研究を通して	21
IX	研究の成果と課題	22
1	成果	22
2	課題	22
	おわりに	22
	主な参考・引用文献	22

自ら体を動かすことを楽しむ幼児の育成

— ボール遊びを通して —

浦添市立仲西幼稚園 大城 美奈子

【要 約】

本研究は、自ら体を動かすことを楽しむ幼児の育成を目指し、ボール遊びに焦点を当て、幼児が自発的に遊ぶ中で多様な動きを経験できるよう、ボール遊びに関する年間指導計画を作成し、幼児の発達や興味に即した環境構成の工夫や個に応じた援助を試みるものである。

キーワード □ボール遊び □多様な動き □年間指導計画 □環境構成 □個に応じた援助

I テーマ設定理由

近年、都市化、少子化、情報化が進展し、社会状況に変化が見られる。幼児の社会環境においてもその影響は大きく、一緒に遊ぶ仲間や公園などの遊ぶ場所が失われつつある。また、ゲームの普及により、室内遊びを好む傾向が見られ、運動の機会が減少してきている。これらに伴い、幼児のコミュニケーションや運動への意欲の低下、多様な動きの獲得の困難さなど心身の発達に影響を及ぼすことが懸念されている。

幼稚園教育要領「健康」では、内容の取扱い(2)において、幼児期運動指針(平成24年)を踏まえ、「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」が明記された。また、小学校学習指導要領では、低・中学年の体育において「多様な動きをつくる運動(遊び)」を通して、体の基本的な動きを培うことをねらいとしている。これらのことから、園生活の中で、多様な動きを経験し、小学校以降の運動に繋がるような実践が求められていると考える。

本学級の幼児の実態として、6月に行った聞き取り調査では、「体を動かして遊ぶことが好き」という回答が82%で、フープや雲梯など好きな遊びに取り組む幼児が多く見られた。一方で、苦手な運動遊びは「できない」と言い、挑戦することへ消極的な幼児や、体力が続かず、すぐに座り込む幼児も見られた。園の取り組みである「運動チャレンジカード」の実施では、縄跳びなど項目にある運動遊びは積極的に行うが、ボール遊びは進んで遊ぶ幼児が少なく、ボ

ウリングやキャッチボールなど特定の遊びに偏りがちである。10月に行った投球と捕球の運動能力テストでは、評価基準表(文部科学省「幼児の運動能力調査」参考)から見ると、投球は評定3未満が46%、捕球は評定3未満が39%となっており、特に、捕球にぎこちなさが見られ、経験の不足が影響しているであろうと捉えることができる。

これまでの保育を振り返ると、運動遊びを取り入れてはいるが、ボール遊びにおいては幼児の発達段階や学びの連続性を踏まえた年間指導計画がなく、環境構成や遊びの展開が十分ではなかった。そのため、教師が幼児の発達に見通しを持てるような年間指導計画を作成し、環境構成や個に応じた援助を行い、個から集団へと遊びの展開を行う必要があると感じる。

ボールは、幼児にとって身近な遊具である。その特性として、遊び方を様々に変えられることや1つのボールで集団遊びへの展開が可能であることが挙げられる。したがって、ボール遊びは、本学級の幼児が友達と一緒に体を動かすことを楽しみながら、多様な動きを経験するための手だてとして効果的であると考えられる。

そこで、園生活の遊びにおいて、多様な動きを経験できるボール遊びを計画的に取り入れ、幼児がボールに興味関心を持ち、自発的に遊べるような環境構成の工夫や個に応じた援助を行う。さらに、個から集団へと遊びを展開し、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わえるような援助を行うことで、自ら体を動かして遊ぶようになるであろうと考え、本テーマを設定した。

II 目指す幼児像

ボール遊びに興味関心を持ち、体を動かす楽しさを味わい、自ら体を動かして遊ぶ幼児

III 研究の目標

自ら体を動かすことを楽しむ幼児の育成を目指して、多様な動きを経験できるボール遊びに関する年間指導計画を作成し、遊びの展開を行うとともに、環境構成の工夫や個に応じた援助を行う。

IV 研究仮説

1 基本仮説

園生活の遊びの中で、多様な動きを経験できるようなボール遊びを計画的に取り入れ、

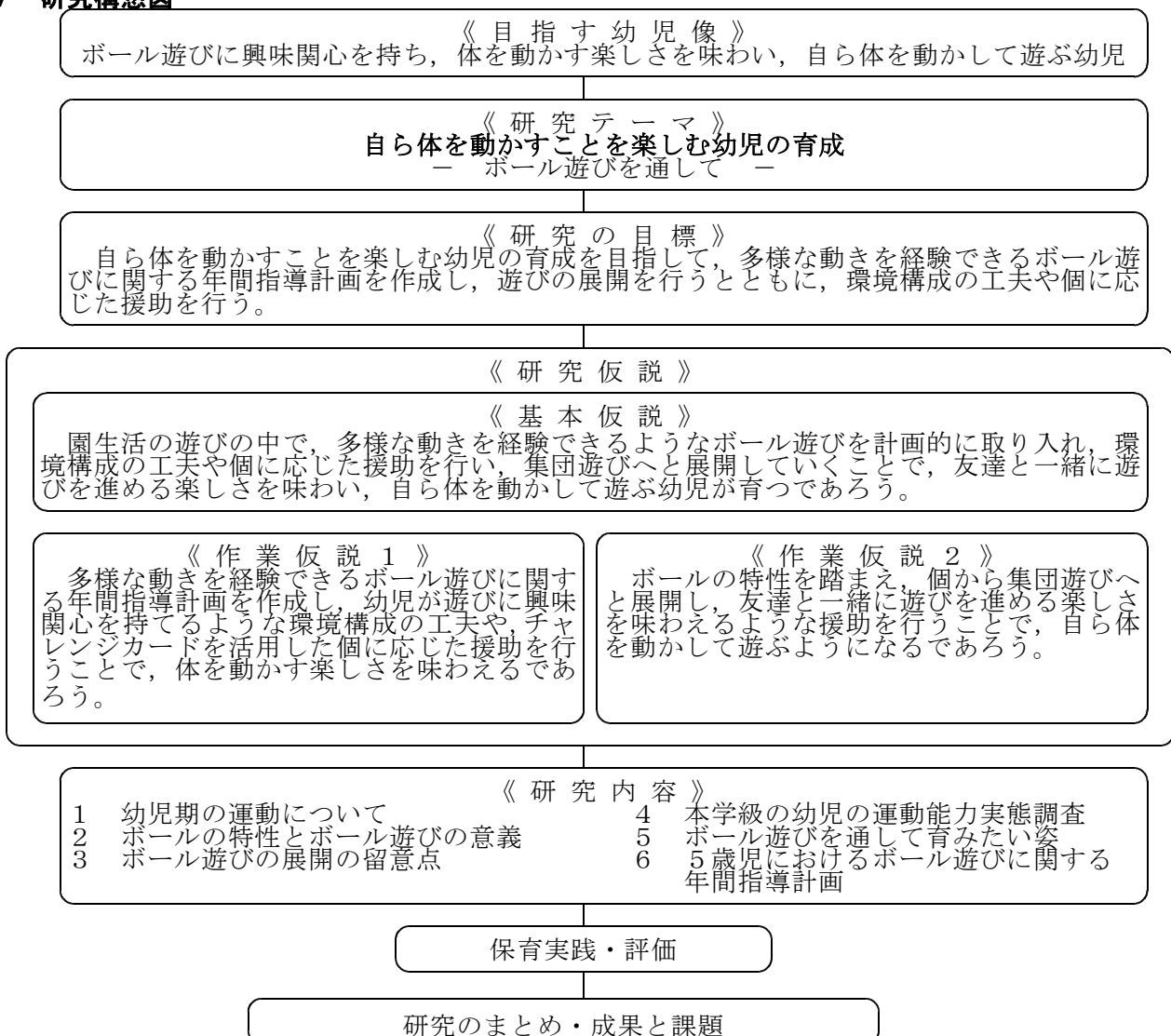
環境構成の工夫や個に応じた援助を行い、集団遊びへと展開していくことで、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わい、自ら体を動かして遊ぶ幼児が育つであろう。

2 作業仮説

(1) 多様な動きを経験できるボール遊びに関する年間指導計画を作成し、幼児が遊びに興味関心を持てるような環境構成の工夫や、チャレンジカードを活用した個に応じた援助を行うことで、体を動かす楽しさを味わえるであろう。

(2) ボールの特性を踏まえ、個から集団遊びへと展開し、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わえるような援助を行うことで、自ら体を動かして遊ぶようになるであろう。

V 研究構想図



VI 研究内容

1 幼児期の運動について

(1) 幼児期の運動の捉え

幼児期は生涯にわたる健康の基礎をつくる時期である。幼稚園教育要領においても、年齢に応じた心身の調和的な発達を促し健康的な生活をするためには、運動が必要であるとされている。

平成29年に告示された幼稚園教育要領において、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」の中にある(1)健康な心と体では、「幼稚園生活の中で、充実感を持って自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しを持って行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる」と記されている。さらに、領域「健康」の内容の取り扱い(2)では、幼児期運動指針(平成24年)を踏まえ、「多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること」が加えられ、遊びの中で、体の動きをコントロールする力を育むことの必要性が述べられている。これらのことにより、幼児期に十分に体を動かすことは、身体諸機能の調和的な発達を促すとともに、情緒の安定や知的な発達、教師や友達とのかかわりの中で育まれる社会性の育ちにも深く関連し、総合的に発達していくと捉える。

(2) 運動することで期待できる効果

幼児期運動指針(平成24年)では、運動することで以下のような効果が期待できるとしている(表1)。

表1 幼児期における運動の意義

① 体力・運動能力の基礎を培う。
② 丈夫で健康な体になる。
③ 意欲的に取り組む心が育まれる。
④ 協調性やコミュニケーション能力が育つ。
⑤ 認知的能力の発達に効果がある。

(3) 幼児期の運動能力と運動技能の発達

運動能力は、運動技能の獲得を通して発達が見られる。

近藤(1980)は図1のように運動能力と運動技能の関係を示している。乳児期において、歩く、立つなどの移動運動を獲得することで、走る、跳ぶ、投げるなど、基本運動の技能の獲得に繋がる。そして、基本運動の技能は、将来のスポーツの技能、仕事・日常生活の技能、芸術の技能などの基本型となるものであるとしている。

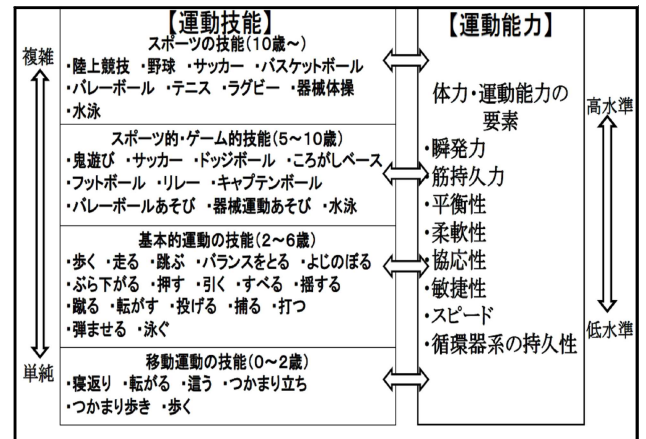


図1 運動技能の発達(近藤『健康』同文書院 1980)

また、近藤(1980)は、これらの運動技能の獲得には、多様な動きの経験が必要であるとしている。そこで、84種の基本動作をまとめ、幼児期において、多様な動作を体得させることを提案している(表2)。

表2 基本的な動作とその分類

カテゴリー	動作の内容	個々の動作
安定性	姿勢変化 平衡動作	たつ・たちあがる、かがむ・しゃがむ、ねる・ねころぶ おきる・おきあがる、つまかさなる・くむ、のる、のりま わす、まわる、ころがる、さかだちする、わたる、あるき わたる、ぶらさがる、うく
		上下動作 のぼる、あがる・とびのる、とびつく、とびあがる、はい のぼる・よじのぼる、おりる、とびおりる、すべりお りる、とびこす
		水平動作 はう、およぐ、はしる・かける・かけっこする、スキップ・ ホップする、ギャロップする、とぶ、あるく、ふむ、すべ る、おう・おいかける、2ステップ・ワルツする
移動動作	回避動作 かわす、かくれる、くぐる・くぐりぬける、もぐる、にげる ・にげまわる、とまる、はいる・はいりこむ	
	操作動作	荷重動作 かつか、ささえる、はこぶ・はこびいれる、こぐ、おこす ・ひっぱりおこす、おす・おしだす、おさえる・おさえ つける、もつ・もちあげる、あげる、うごかす、つきおと す、なげおとす、おぶう・おさぶる
		脱荷重 動作
	捕捉動作	つかむ・つかまえる、あてる・なげあてる・ぶつける、 とめる、うける・うけとめる、わたす、つむ・つみあげる まわす、ほる、ころがす、ふる・ふりまわす
攻撃的 動作	たたく、つく、わる、くずす、しぼる・しぼりつける、た おす・おしたおす、すもうをとる、うつ・うちあげる・うち とばす、なげる・なげあげる、ける・けりとばす、ひく・ ひっぱる、ふりおとす、あたる・ぶつかる	

(近藤「幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究」
体育科学 第8巻 1980)

研究を進めるにあたり、運動技能の発達過程について、幼児期に獲得した運動技能が小学校の体育においてどのように関連しその後の発達に結びつくかを確認する必要があると思われる。

そこで、ボール遊びに関して、幼児期から小

学校1年までの接続期における運動技能の発達過程を表にまとめた(表3)。

表3 ボール遊びに関する運動技能の発達過程
(東京都日野市コアカリキュラム2006を参考)

	就学前教育 (保育園・幼稚園)	小学校1年
発達段階	<ul style="list-style-type: none"> 走りながらボールを蹴る。 目標に向かってボールを投げる。 ボールを投げる強さや、タイミングを調整する。 ボールを様々なやり方で投げる。 (片手投げ、両手投げ、下手投げ、真上に投げる) ボールの飛んでくる方向を見て受け取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ボールをまっすぐに投げるができる。 目標を見て、ボールを力いっぱい投げるができる。 ボールをまっすぐに蹴ることができる。 シュートやパスなど力いっぱいボールを蹴ってゲームができる。
運動機能を高める遊びの例及び運動の例	遊び【ボール遊び】 <ul style="list-style-type: none"> ドッジボール サッカー遊び まとあて遊び ポウリング遊び 	領域【ゲーム】 <ul style="list-style-type: none"> ボール投げゲーム(まとあてゲーム, ドッジボール) ボール蹴りゲーム(まとあてシュート, ドリブル競争, シュートゲーム, サッカー)

これらを踏まえ、幼児の発達過程を念頭に置きながら、多様な動きを経験できるボール遊びの展開を考えていきたい。

2 ボールの特性とボール遊びの意義

(1) ボールの特性

ボールの特性として、新里(1995)によると、以下の7点にまとめられる(表4)。

表4 ボールの特性

<ol style="list-style-type: none"> ① ボールは、丸く弾力性がある。 ② 幼児の好奇心をあおり、興味や関心を持たせ、多種多様な変化のある遊びを展開できる。 ③ 無理に筋力を必要としない。 ④ 調整力の空間認知、リズム感、タイミング、協応性、正確性などが養成される。 ⑤ 安全性に優れている。 ⑥ 大小、様々な素材があり、対象児や遊びに即したボールを準備できる。年中、年長になると、共同、共有した集団遊びの形態を構成できる。 ⑦ 安価で手に入り、素材が身近にある。

(新里「幼児期の運動遊びの研究」沖縄女子短期大学紀要第11号 1995年)

(2) ボール遊びの意義

ボール遊びの意義として、岡本(1958)を参考に「身体的価値」、「社会的価値」、「情緒的価値」、「知的価値」の4つに分けてまとめた。

① 身体的価値

ボール遊びは、全身の筋肉活動であり、ボールを道具として、幼児の身体的・運動的発達が促され、「筋力」、「持久力」、「身

体支配力」を獲得していく。

ア 「筋力」の獲得

ボール遊びは、投げる、打つ、蹴る、転がすなどの運動が主軸となる運動量の大きな全身的な運動である。そのため、腕、脚、胸部、全身の筋力の発達を促す。

イ 「持久力」の獲得

ボール遊びは幼児の興味を引き、熱中して遊ぶ中で、身体的な持久力を獲得する。

ウ 「身体支配力」の獲得

ボール遊びの中で、全身を動かし、ボールに対してどう動くかを判断し、全身を適応させていく。また、多様な動きの獲得は、突発事故から体を守ることに結びつく。

② 社会的価値

ボールは、本来的に協同遊びとしての遊具で、団体で遊ぶところにその妙味がある。ボール遊びで、幼児は1個のボールで皆が平等に仲良く遊ぶには、どんな遊びを、どんな方法でやったら良いか、どんな約束が必要か、自分達のグループが勝つにはどうしたら良いかななどの事態に当面する。このような経験を通して互いに考え、協力するという社会性の芽生えが育成されていく。

③ 情緒的価値

環境の変化や新しい友達とのかかわりに慣れない幼児、気持ちが落ち着かない幼児など実態は様々であるが、ボールを与えることで遊びが始まり、この遊びに熱中して、環境の圧力から解放され情緒が安定していく。

④ 知的価値

ボール遊びを通して、まりつきで何回ついたら交代するかということや、玉入れていくつ入ったかなど、豊かな数概念の基礎が培われていく。

(3) ボール遊びを通して「自ら体を動かして遊ぶようになる過程」

幼児が、ボール遊びを通して「自ら体を動かして遊ぶようになる過程」を次のように捉える(図2)。

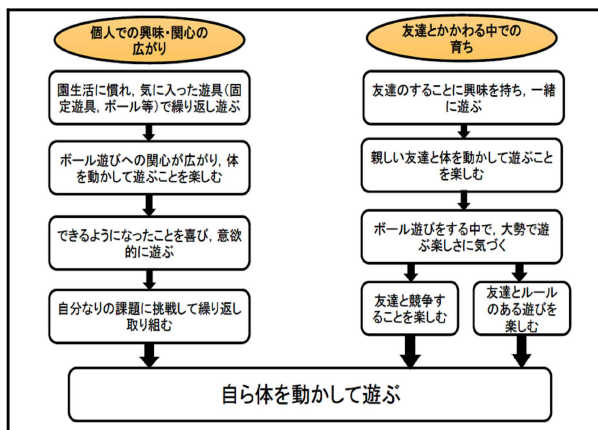


図2 ポール遊びを通して「自ら体を動かして遊ぶようになる過程」

① 個人での興味・関心の広がり

幼児は、自分の興味がある遊びに繰り返しかかわることで、その遊びの楽しさや面白さに気づき、自ら遊びを進めるようになる。ボール遊びにおいても、繰り返し遊ぶ中で、様々な動きを経験し、できるようになった喜びを味わい、自ら課題に挑戦して取り組むなど自発的に体を動かすようになるであろうと捉える。

② 友達とかかわる中での育ち

幼児は、友達の遊びに興味を持ち、「自分もやってみたい」と、意欲的に取り組んだり、難しいことは互いに教え合ったりするなど、一緒に遊ぶ友達から受ける影響は大きい。ボール遊びにおいて、友達とルールのある遊びを進めて行く中で、友達と協力したり、ルールを考えたりしながら遊びを進める楽しさを味わうことで、自ら体を動かして遊ぶようになるであろうと捉える。

(4) ボール遊びにおける環境構成と援助の工夫

① 環境構成の工夫

幼児の興味や関心を引き出す場の設定を行う。例えば、大小様々なボールを種類別にかごに分けて準備したり、まとあて遊びなどの遊びの種類によってコーナーの線を引いたりする。環境を構成する際には、幼児の発達や遊びの道筋を見通し、「時間・空間・仲間」を意識した計画的な環境構成が重要であると考える。また、幼児の遊びは様々に変化するものであることを踏まえ、状況に応じて再構

成していくことを念頭に置き、環境づくりをする。

② 教師の援助の工夫

ア 安定した信頼関係づくり

幼児が自発的に遊ぶようになるためには、教師との安定した信頼関係が基盤となると言われている。そこで、教師は、一人一人の幼児の思いに寄り添い、幼児が安心して遊べるように見守り、喜びや楽しさを共感したり、励ましたりしながら援助を行うことが重要であると考えられる。

イ 遊びの展開

幼児の遊びが発達に即した内容であり、十分に満足感を味わえるような遊びの展開を行うことが求められると考える。

そこで、「アクティブ・ラーニングの三つの視点を踏まえた、幼児教育における学びの過程（5歳児後半の時期）のイメージ」（平成28年教育課程部会幼児教育部資料8）を参考にボール遊びの展開を考え、図3のように表した。

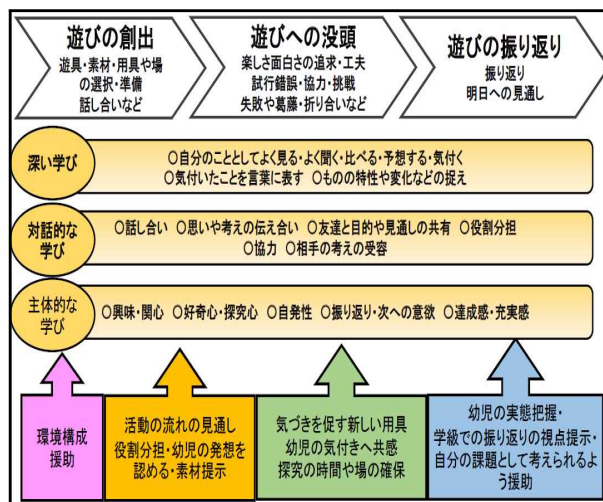


図3 アクティブラーニングの視点から考えた遊びの展開

学びの連続性に関しては、幼児期から小学校への接続期におけるアプローチカリキュラムを意識した遊びの展開を行っていくことが必要であると考えられる。そこで、小学校における体育のねらい及び内容を確認し、多様な動きを経験できるような遊びの展開を行うようにする（図4）。

発達の特性に於じた遊びの提供 一人一人の発達に於じた援助			発達段階のまとまりを 踏まえた指導内容の体系化				
幼稚園			小学校				
3~4才	4~5才	5~6才	1・2年	3・4年	5・6年		
心身の調和のとれた発達の基礎を 培う時期			様々な動きを身に付ける時期		多くの運動を 体験する時期		
ね ら い ・ 内 容	明るく伸び伸びと行動し、充 実感を味わう。 自分の体を十分に動かし、 進んで運動しようとする。		体づくり運動 <small>体ほぐしの運動 体ほぐしの運動 体ほぐしの運動 多様な動きをつくる運動</small>		体づくり運動 <small>体ほぐしの運動 体ほぐしの運動 体ほぐしの運動 体力を高める運動</small>		
			器械・器具を使っ ての運動遊び	器械運動			
			走・跳の 運動遊び	走・跳の 運動	陸上運動		
			水遊び	浮く・泳ぐ 運動	水泳		
			表現 リズム遊び	表現運動			
			ゲーム		ボール運動		

図4 幼小接続期における体育(運動)のねらい及び内容

また、体を動かして遊ぶ中での集団による仲間づくり、遊び方や約束ごとの工夫、喜びや悔しさの共感などといった経験が、幼児の社会性やコミュニケーションの面において深く関連し総合的に発達していくとされている。

そこで、幼児期は友達とのかかわりが広がる時期であることも踏まえ、個からグループ、そしてクラスでの集団遊びへと展開できるような環境作りや援助が必要であると思われる。

ウ 幼児同士のかかわりの中での援助

幼児は、園生活の中で、教師と同じように友達から受ける影響が大きく、友達の遊びに関心を寄せたり、分からないことは教え合ったりするなど、友達は幼児の成長に欠かせない存在である。そこで、教師は、幼児同士のかかわりの中で、友達の良さに気付き、認め合ったり、互いの考えを遊びに取り入れたりできるよう、必要に応じて仲立ちしたり、時には提案するなどして援助していく。

エ 個に応じた援助

幼児期は、発達や家庭環境に個人差が見られるため、教師は、一人一人の幼児の実態に応じた援助を行っていく必要があると思われる。体を動かす遊びにおいては幼児の運動能力の発達段階を捉えながら、それぞれの幼児に合った声かけなどの援助や指導の仕方を工夫していく。

3 ボール遊びの展開の留意点

ボール遊びを展開していく上で、留意する点について、新里(1995)を参考に以下にまとめた。

(1) 幼児の実態把握

幼児の興味関心、発達に即した展開になるように、日常的に幼児の活動をよく観察し、実態把握をする。

(2) 環境構成の工夫

幼児が園生活を過ごす中で、自由にボールに触れることのできる環境構成を行う。また、自由遊びのときでも、幼児が進んで遊べるように、必要な線や円を引いておいたり、ボールや遊具は容易に取り出ししたりできるように種類ごとに分けて置くなど環境構成を行う。

(3) 十分に遊ぶ時間の確保

幼児が遊び方を工夫して十分に遊べるような時間を確保し、幼児が創り出した遊びを大切にしながら発展させていくようにする。

さらに、個人差などにも十分配慮し、集団遊びをする際は、個人で練習できる時間を確保する。

(4) 遊びの展開(チャレンジカードの活用)

ボールの操作に関して、幼児が楽しく遊ぶ中で、様々な動きに挑戦することができるよう、チャレンジカードを活用する。スモールステップを取り入れ、個の発達段階に応じた援助を行うことで、幼児が自分の力でできた喜びを味わい、さらに意欲的に遊びに取り組めるようにする。

(5) 素材の工夫

遊びの内容によっては、ボールの大きさや硬さ、色別などに配慮し、必要な補助道具などを加えたりする。

(6) 場の展開

遊びに必要なボールや、まとなどの補助具の作成をし、幼児の動機、興味づくりをしていく。

(7) 安全点検

遊ぶ場所や遊具などの安全点検をし、幼児が安全に遊べるスペースを十分にとる。

4 本学級の幼児の運動能力実態調査

10月に、本学級の幼児28名に対し、ボールの操作に関する運動能力テスト（平成24年文部科学省「幼児の運動能力調査」参考※）を行った。

「投球」では、評価基準表（図5※同調査参考）より、テニスボール投げにおいて、男児は6m以上、女児4m以上が評定3となっている。

評定	男児 (m)	女児 (m)
5	11.5～	7.5～
4	8.5～11.0	5.5～7.0
3	6.0～8.0	4.0～5.0
2	4.0～5.5	3.0～3.5
1	0.0～3.5	0.0～2.5

※50cm単位で測定する為、50cm未満は切り捨てる。

図5 投球の評価基準表

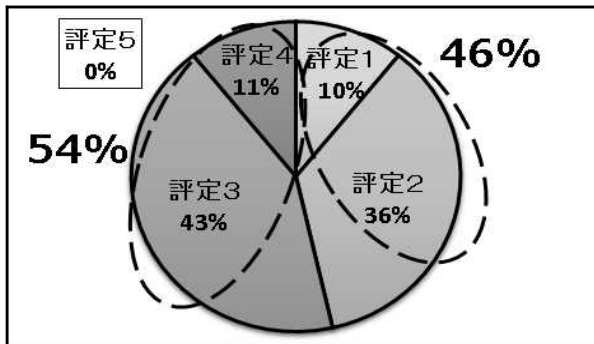


図6 【10月】運動能力テスト（投球）

本学級の幼児においては、図6のように、評定が3以上の幼児が54%であった。一方、評定が3未満が46%で、投げ方にぎこちなさが見られる幼児もいた。評定5は0%であった。

「捕球」では、直径15cmのまりつき用のゴムボールを3m離れた所から教師に投げてもらい、10回のうち何回捕ることができるかを調査したものであるが、男児は6回以上、女児は5回以上が評定3となる（図7）。

評定	男児 (回)	女児 (回)
5	10	10
4	9	8～9
3	6～8	5～7
2	2～5	2～4
1	0～1	0～1

図7 捕球の評価基準表

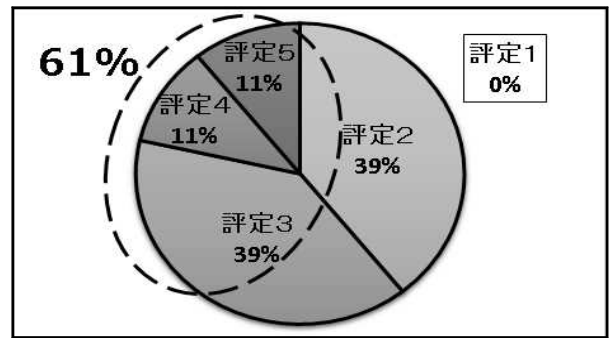


図8 【10月】運動能力テスト（補球）

本学級において、図8のように、評定3以上の幼児は61%であった。また、評定3未満は39%であり、特に女児に多いが、全体的に、ボールを捕る時に体が横を向いていたり、掴む動作が遅れたためにボールを落としたりする姿が見られ、捕る動きの獲得において手だてを工夫していくことが必要であると捉える。

「まりつき」（図9）においては、回数を段階的に分けて見取ることにした。30回以上の幼児が18%で、100回を越える幼児もいる。これに対して5回以下が46%であった。10回以下の幼児は、まりの動きに合わせて体を動かしたり、まりを垂直につくようにコントロールしたりすることへ難しさを感じている姿が見受けられ、今後の実践の中で改善できるような取り組みをしていきたいと考える。

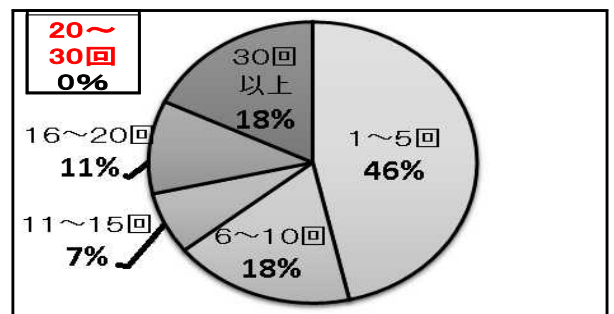


図9 【10月】運動能力テスト（まりつき）

調査の結果から、様々な動きを獲得するには、幼児の実態把握と教師の意図的・計画的な遊びの導入や展開、環境・教材の工夫が必要であると考え、研究の中でボール遊びに関する年間指導計画を作成していく。また、「投げる」、「捕る」、「つく」、「蹴る」の4つのボール操作のチャレンジカードを活用し、幼児の運動能力の発達段階に応じた個別の援助を行っていく。

5 ボール遊びを通して育みたい姿

ボール遊びの中で援助を行う際に、幼稚園教育要領の「幼児教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」を考慮する必要がある。そこで、これを

踏まえ、ボール遊びを通して育みたい具体的な姿を表し、そのための教師の援助と手だてとなるボール遊びを表にまとめた。また、幼児期の育ちが小学校学習指導要領の低学年「体育」における内容でどう関連するかを表した(表5)。

表5 ボール遊びを通して育みたい姿

	幼児期に育みたい資質・能力	ボール遊びを通して育みたい姿	◎環境構成と教師の援助	ボール遊び
健康	健康な心と体	自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。	◎進んで遊びに取り組みめる環境構成(用具, 雰囲気作り, 時間の確保) ◎教師も一緒に遊びながら、遊び方や遊具の使い方を知らせる。 ◎自分からやってみようとする姿を認め、できた喜びを共感したり、励ましたりして、意欲を高めていく。	まりつき ボウリング ボール転がし まとあて遊び 玉入れ ボールパス キャッチボール
	自立心	遊びに必要な態度を獲得し、見通しを持って最後までやり遂げるようになる。	◎遊びに見通しが持てるような環境構成(遊び方や、ルールの表示, 活動の流れや、活動が終わる時間) ◎様々な遊びに挑戦し、最後までやり遂げる達成感を味わえるよう幼児の気持ちに寄り添いながら励ましたり、声かけをしたりするなど援助する。	ルールのあるボール遊び ドッジボール } ※ サッカー } まとあてゲーム }
	多様な動きの獲得	多様な動きを経験し、体の動きを調節できるようにする。	◎多様な動きができる環境(コーナーの設置, 用具, 時間の確保, 遊び方の絵表示) ◎いろいろな動きに挑戦する姿を認め、遊びの状況に合わせて用具の種類やルールを変えたり、運動量に合わせて十分な場を確保したりする。	キャッチボール ボール転がし ボール体操 つま先キック サーキット遊び
人間関係	協同性	友達と遊ぶ中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりする。	◎自分たちでルールや約束事を考えたり、遊びに必要な物を準備したりすることができるよう、場や時間を確保する。	ルールのあるボール遊び※ キャッチボール
	道徳性・規範意識の芽生え	友達と遊ぶ中で、相手の気持ちに気付く。きまりの大切さに気付く、守ろうとする。	◎遊びの中で意思疎通が上手くいかない場面が見られたら仲立ちし、互いの思いに気付けるよう援助する。 ◎遊びの中での出来事を取り上げながら、ルールや決まりを守って遊ぶ事がなぜ大事なのかを話し合うことで、守ろうとする気持ちを育む。	ルールのあるボール遊び※ キャッチボール サーキット遊び
	社会生活・いろいろな人とのかわり	先生や友達と一緒に遊ぶことを楽しむ。	◎自分から進んでボール遊びに参加できるよう、教師も一緒に遊びながら他児へ仲介することで意欲を高め、達成感を味わえるようにする。	ルールのあるボール遊び※ キャッチボール
環境	思考力の芽生え	考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	◎様々な遊び方があることを絵表示やチャレンジカードを活用して知らせ、その他にも自分で考えた遊び方があれば全体の場で紹介し、他児の考えに触れながら遊びが発展していくようにする。	まとあて遊び キャッチボール まりつき ボール投げ
	自然との関わり・生命尊重	身近な遊具に興味を持ち、かかわって遊ぶ。	◎進んで遊びに取り組みめる環境構成をする。また、教師が遊びに誘い、一緒に取り組みながら、遊び方を知らせていく。	ボール体操 まとあて遊び (戸外の自然を利用)
	数量・図形・文字などへの関心・感覚	遊びの中で、数量や文字に興味関心を持つ。	◎数や文字に親しめるよう、絵表示を掲示したり、遊具の数を一緒に数えたりする。	まりつき キャッチボール ルールのあるボール遊び※
言葉	言葉による伝え合い	自分の気持ちを言葉で表現する。	◎自分の思いを出せるよう、幼児の気持ちに寄り添いながら、問いかけたり、言葉を補ったりするなど援助する。	ルールのあるボール遊び※ ボール渡しゲーム
	人の話を聞く	先生や友達の話に興味関心を持って聞く。	◎話を聞くときの姿勢や態度を自分で意識できるよう、個別に声をかける。	雷ゴロゴロ 命令ゲーム
表現	豊かな感性と表現	遊びの中で感動したことを伝え合う。自分のイメージを動きや言葉で表現する。	◎楽しかったことなどの経験したことを話す場を設ける。幼児の思いを受け止め、共感していく。 ◎遊びのイメージが持てるよう、ルールの説明の際に絵表示などを使って具体的に伝える。 ◎幼児なりのイメージを受け止め、その動きや考えを遊びの中に取り入れていく。	ルールのあるボール遊び※ キャッチボール ボール渡しゲーム ボウリング まとあて遊び
	色・形・音などの美しさや面白さに対する感覚	様々な音, 形, 色, 手触りなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。	◎様々な形や大きさのボールや遊具を用意する。また、素材に触れることで、その特性や感触に気付けるよう言葉がけをしていく。	ボール並べ まりつき ボウリング まとあて遊び

**小学校の
ボール運動**

【小学校学習指導要領
体育指導内容より引用】

- ・ボールゲームに進んで取り組むこと。
- ・ねらったところに緩やかにボールを投げたり、転がしたり、蹴ったりすること。
- ・ボールを捕ったり、止めたりにすること。
- ・多様な動きをつくる運動遊びでは、体のバランスをとったり、移動をしたりすること。
- ・運動の順番やきまりを守り友達と仲よくゲームをすること。
- ・用具の準備や片づけを友達と一緒にすること。
- ・簡単な規則を工夫したり、攻め方を決めたりすることができるようにする。
- ・危険物がないか、ゲームをする場が十分にあるかなどの場の安全に気を付けること。
- ・友達の良い動きを見つけたり、考えたりしたことを友達に伝えること。
- ・ボールゲームでは、ボールを持たないときの動きによって、的に当てるゲームや、攻めと守りのあるゲームをすること。

6 5歳児におけるボール遊びに関する年間指導計画（仲西幼稚園の教育計画参考）（表6，7）

表6 5歳児におけるボール遊びに関する年間指導計画（Ⅰ～Ⅲ期）

	Ⅰ期(4・5月)		Ⅱ期(6・7月)		Ⅲ期(8・9・10月)	
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> 進級児は、年長になった喜びと自覚が感じられ、積極的に園生活を行おうとする。 新入園児は、新しい生活に期待を寄せている反面、中には不安を感じている幼児もいる。 		<ul style="list-style-type: none"> いろいろな遊具や用具を積極的に使って遊んだり、繰り返し体を動かしたりして遊ぶことを楽しむ様子が見られる。 気の合う友達と言葉を交わしながら遊ぶ姿が見られる。 		<ul style="list-style-type: none"> 遊びが活発になり、トラブルも見られるが、自分たちで解決しようとする姿が見られる。 不得意なことも、自分なりの目標を持ち、進んで取り組む中で、意欲や自信が見られるようになってくる。 	
発達過程	【友達いっぱい】 (進級児)年長児になった喜びを感じ、期待を持って周りの環境にかかわる時期 (新入園児)教師や友達に親しみ、園生活に安心感を持つ時期		【友達と一緒に】 園生活の中で安定し、気の合う友達とかかわりながら遊びを広げていく時期		【考えを出し合って】 友達とのつながりが深まり、自分の力を発揮していく時期	
ねらい	(進級児)年長児としての自覚を持ち、遊びや活動に取り組む。 (新入園児)喜んで登園し、先生や友達に親しみをもつ。		気の合う友達とかかわりながら、遊びを広げていく楽しさを味わう。		友達と遊ぶ中で、自分なりに挑戦しようとする気持ちを持ち、試したり、工夫したりしながら自分の力を発揮して遊ぶ楽しさを味わう。	
内容 ●ボール遊び	<ul style="list-style-type: none"> 好きな遊びを見つけ、教師や友達と一緒に遊ぶ。 固定遊具の使い方が分かり、安全に遊ぶ。 ●教師とボールで遊んだり、触れ合ったりする中で、気持ちが安定し、落ち着いて過ごす。 		<ul style="list-style-type: none"> 気の合う友達と一緒に、体を動かして遊ぶことを楽しむ。 ○様々な遊具や用具の使い方が分かり、安全に遊ぶ。 ●様々な種類のボールに触れたり、自分で遊びに必要な物を作ったりして遊ぶ。 		<ul style="list-style-type: none"> ○友達と一緒に運動したり、競争したりして、体を動かして遊ぶことを楽しむ。 ○様々な運動遊びに興味を持ち、自分なりの課題を持って挑戦する。 ●ボールを使って遊び、操作の仕方を考えたり、工夫したりして遊ぶ。 	
具体的な遊び	主な運動遊び	<ul style="list-style-type: none"> 固定遊具 フープ ぼっくり 短縄跳び 	<ul style="list-style-type: none"> 固定遊具 フープ 短縄跳び 大縄跳び 	<ul style="list-style-type: none"> 巧技台 マット遊び リレー 	<ul style="list-style-type: none"> 固定遊具 フープ 短縄跳び 大縄跳び 	<ul style="list-style-type: none"> 竹馬 やっここ 跳び箱 リレー
	主なボール遊び	単数(個人)	<ul style="list-style-type: none"> 的当て 新聞ボール遊び まりつき ボウリング 風船キャッチ 	<ul style="list-style-type: none"> 的当て 新聞ボール遊び まりつき ボウリング ボール体操 		<ul style="list-style-type: none"> 的当て まりつき ボール転がし ボールキック(壁当て)
		複数(グループ)	<ul style="list-style-type: none"> ボールキャッチ ボール転がし ボール運び(手渡し) 	<ul style="list-style-type: none"> ボールキャッチ ボール転がし ボール運び(2人で持って) 動物コーン(的当てゲーム) 		<ul style="list-style-type: none"> ボールキャッチ ボール転がし ボール運び(かごへ投げる) コーンでボールキャッチ
		集団(クラス)	<ul style="list-style-type: none"> 追いかけてボール入れ 玉入れ トンネルボール 	<ul style="list-style-type: none"> 雷ゴロゴロ(ボール渡しゲーム) ボールリレー 風船バレーボール 宝探し 		<ul style="list-style-type: none"> ボールリレー 転がしドッジボール 大玉転がしリレー 円になってサッカー
★環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ★固定遊具、遊び道具の安全点検を行う。 ★安心して遊びに取り組めるようにする。(用具の配置、雰囲気作り、時間の確保) ★ケンケンパ、おはようボールの設置 		<ul style="list-style-type: none"> ★固定遊具、遊び道具の安全点検を行う。 ★多様な動きができる環境構成を行う。(コーナーの設置、用具、時間の確保、遊び方の絵表示) ★ドンじゃんけん、的当ての設置 		<ul style="list-style-type: none"> ★運動遊具の遊び方や技の絵表示を遊びの場に掲示しておく。 ★運動チャレンジカードを作成し、様々な運動遊びに興味を持ち、挑戦しようとする気持ちが持てるようにする。 ★運動遊びコーナーの設置 	
◎教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ◎教師との信頼関係を築き、安心して遊べる雰囲気づくりをする。 ◎教師も一緒に遊びながら、ボールを使った遊び方を知らせる。 ◎様々な形や大きさのボールや遊具を用意し、ボールに親しめるようにする。 		<ul style="list-style-type: none"> ◎いろいろな動きに挑戦する姿を認め、遊びの状況に合わせて用具の種類やルールを変えたり、運動量に合わせて十分な場を確保したりする。 ◎自分から進んでボール遊びに参加できるよう、教師も一緒に遊びながら他児へ仲介することで、意欲を高め、達成感を味わえるようにする。 		<ul style="list-style-type: none"> ◎進んでボール遊びに取り組めるよう教師が遊びに誘い、一緒に取り組みながら、遊び方を知らせていく。 ◎様々なボールの遊び方があることを絵表示やチャレンジカードを活用して知らせ、その他にも自分で考えた遊び方があれば全体で場を紹介し、遊びの発展につなげる。 ◎簡単なルールのあるボール遊びを取り入れ、達成感を味わわせる。 	

表7 5歳児におけるボール遊びに関する年間指導計画(Ⅳ～Ⅴ期)

	Ⅳ期(11・12月)	Ⅴ期(1・2・3月)
幼児の姿	<ul style="list-style-type: none"> いろいろな遊びに自分から挑戦しようとする姿が見られる。 友達とみんなで一つの目的に向かって、何かをやり遂げようとする姿が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人が役割を持って行動できるようになり、協力して遊んだり、活動を進めたりすることの楽しさが分かってくる。また、遊びの中で、友達の力を認め合う姿も見られるようになってくる。
発達過程	<p>【みんなの力を合わせて】</p> 友達とイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく時期	<p>【もうすぐ1年生】</p> 自分の力で頑張ろうとし、自信を持って行動していく時期
ねらい	グループやクラスの友達と一つの目的に向かって取り組む楽しさや、競い合って遊ぶ楽しさを味わう。	友達と一緒に積極的に遊びに参加し、互いの思いや考えを出し合いながら、遊びを進めていく楽しさを味わう。
内容(●ボール遊び)	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の力を発揮しながら、運動遊びを楽しみ、充実感を味わう。 ●ルールのある遊びの中で、友達と思いを出し合いながら、ルールを作ったり、遊びに必要な物を準備したりして、遊びを進めて行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ○一人一人が自分なりの目標を持ち、自分の力を十分に発揮しながら最後まで取り組む。 ●気の合う友達でグループを作ったり、クラスみんなでルールのある遊びを楽しんだりして、充実感を味わう。
具体的な遊び	主な運動遊び <ul style="list-style-type: none"> 固定遊具 フープ 短縄跳び 大縄跳び 竹馬 やっここ 跳び箱 	<ul style="list-style-type: none"> 固定遊具 フープ 短縄跳び 大縄跳び 竹馬 やっここ 跳び箱
	単数(個人) <ul style="list-style-type: none"> 的当て まりつき ボール転がし ボールキック(壁当て) 	<ul style="list-style-type: none"> 的当て まりつき ボール転がし ボールキック(壁当て、的当て)
	複数(グループ) <ul style="list-style-type: none"> ボールキャッチ ボール転がし ボール運び(ドリブルリレー) 通り抜けドリブル 	<ul style="list-style-type: none"> ボールキャッチ ボール転がし ボール運び(サーキット遊び) クリーン大作戦
集団(クラス) <ul style="list-style-type: none"> 転がしドッジボール 円形ドッジボール 的当てドッジボール サッカー サーキット遊び 	<ul style="list-style-type: none"> 転がしドッジボール ドッジボール 的当てドッジボール サッカー サーキット遊び 	
★環境構成	<ul style="list-style-type: none"> ★遊びに必要な道具を整理して遊びの場に置いておく。また、遊びに使う場の設定を行う。(ラインを引く、コーンを置く、用具の配置) ★遊びに見通しが持てるような環境構成を行う。(遊び方・ルールの表示、活動の流れや終わりの時間) ★遊具(ボール、大型積み木)の準備や片付けを友達と一緒に出来るよう、遊具の扱い方や並べ方の絵表示をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ★遊びに必要な道具を整理して遊びの場に置いておく。また、遊びに使う場の設定を幼児と一緒にやる。(ラインを引く、コーンを置く、用具の配置) ★遊びに見通しが持てるような環境構成を行う。 ★遊具(ボール、巧技台)を自分達で組み合わせて遊べるよう、遊具を用意する。安全に配慮する。
◎教師の援助	<ul style="list-style-type: none"> ◎ボール遊びのイメージが持てるよう、ルールの説明の際に絵表示などを使って具体的に伝える。 ◎自分たちでルールや約束事を考えたり、遊びに必要な物を準備したりすることができるよう、場や時間を確保する。 ◎教師も一緒に遊びながら、集団でのボール遊びのルールや役割を確認し、ルールを守ることで遊びが楽しくなることに気付かせていく。 ◎自分から進んで集団遊びに参加できるように、教師も一緒に遊びながら他児へ仲介することで、皆で遊ぶ楽しさや、達成感を味わえるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎遊びの中で意思疎通が上手いかわからない場面が見られたら、仲立ちし、互いの思いに気付けるようにする。 ◎アイデアやイメージが実現できるように手伝ったり、よいアイデアを認め他児へ紹介したりすることで、遊びを発展できるようにする。 ◎ボール遊びの中での出来事を取り上げながら、ルールや決まりを守って遊ぶことがなぜ大事なのかを話し合い、守ろうとする気持ちを育む。 ◎話し合いの場で、自分の思いを出せるよう、幼児の気持ちに寄り添いながら、問いかけたり言葉を補ったりするなど援助する。

VII 保育実践

1 題材名 『ボール遊び』

2 ねらい

- (1) ボール遊びの中で、投げる、捕る、蹴る、つくなどの多様な動きを経験し、様々に試したり工夫したりして自分の体を動かして遊ぶことを楽しむ。
- (2) まとめてドッジボールに意欲的に参加し、友達と一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。

3 題材について

(1) 本学級の実態

本学級の幼児の実態として、運動遊びが好きな子が多く、自分の好きな運動に積極的に取り組むが、6月の幼児の聞き取りアンケートでは、「ボール遊びが好き」と答えた子が1名で、ボール遊びをする子の姿が少ない状況である。また、10月に行った本学級の幼児の運動能力テストの結果から、ボールを投げる、捕る、つくの操作の動きにぎこちなさが見られ、経験の不足が見受けられたことから、ボール遊びを楽しむ中で、多様な動きを経験できるような手だての工夫が必要であると捉える。

(2) 題材として取り上げた理由

本学級の実態として、ボールの操作に関する動きに経験の不足が見受けられたことから、園生活の遊びやボール遊びの中で、体を動かすことを楽しみながら、多様な動きを経験できるような遊びを計画的に取り入れる必要があると考える。そこで、手だてとして、幼児がボールに興味関心を持ち、自発的に遊べるような環境構成の工夫や個に応じた援助を行う。さらに、集団遊びへと展開していくことで、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わい、自ら体を動かして遊ぶ幼児が育つであろうと考え、題材として取り上げた。検証保育では、ボールに親しめるように、身近にある新聞紙や風船を取り入れ、投げる、捕るなどの多様な動きができるように遊びを充実させたい。そして、「投げる」、「捕る」、「蹴る」、「つく」の4つのボール操作のチャレンジカードを活用し、幼児の運動能力の発達段階に応じた個別の援助を行っていく。また、集団遊びでは、小学校1年生の体育の単元「まとめてゲーム」を参考に、まとめてドッジボールを取り入れたいと考える。これは、幼児が友達と協力したり、競い合ったりすることを楽しんだりしながら、ボールを投げる、捕る操作が主な動きとなる集団ゲームである。そこで、遊びの展開として、蹴る、転がすなどの多様な動きを含んだまとめてドッジボールへと遊びの内容を工夫し、幼児の興味や発達段階に応じて展開をしていきたいと考える。留意点として、ボールの大きさや素材を遊びの内容に合わせて用意し、ルールを幼児が分かりやすいように簡易化したり、ルールの説明や遊びの導入、振り返りをする際には、写真や動画などの視聴覚教材を導入していく。

4 検証保育の全体計画

実践	日程	題材及び調査等	ねらい	内容
1	10/27(金)～ 10/30(月)	○アンケート調査① ○運動能力テスト①	・幼児の実態を把握する。 ・幼児の家庭での実態を調査し、 保育実践に活かす。	・幼児への聞き取り調査① ・幼児の運動能力テスト① (投球、捕球、まりつき) ・保護者へのアンケート調査①
2	11/28(火)	○新聞紙ボールで遊ぼう (玉入れゲーム)	・身近な素材である新聞紙を使い、 体を動かして遊ぶことを楽しむ。	・新聞紙でボールを作り、体を動かして遊ぶ。 (投げる、捕る、転がす)

実践	日程	題材及び調査等	ねらい	内容
3	11/30(木) 13ページ参照	○風船ボールで遊ぼう (まりつき, ボール蹴り)	・風船ボールを使い, 自分の体の動きを調整したり, 遊び方を工夫したりしながら体を動かして遊ぶことを楽しむ。	・風船に自分でガムテープを張り, ボールを作る。 ・風船ボールを使って, 体を動かして遊ぶ。(投げる, 捕る, 蹴る, つく, 転がす, 打つ)
4	12/5(火)	○いろいろなボールで遊ぼう (まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) ○ボール運びリレーをしよう (蹴る, 転がす)	・様々なボールの感触や特性に気付き, ボール遊びを楽しむ。	・様々な大きさや形のボールに触れ, 体を動かして遊ぶ。 (投げる, 捕る, 蹴る, つく, 転がす, 打つ) ・ボールを蹴ったり, 転がしたりして, ボール運びリレーを楽しむ。
5	12/7(木)	○コーナーでボール遊び (まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) ※チャレンジカード実施 ○まとあてドッジボール①	・コーナーでの遊び方を知り, ボール遊びを楽しむ。 ・まとあてドッジボールのルールを知り, 体を動かして遊ぶことを楽しむ。	・チャレンジカードにあるボール遊びのコーナーで体を動かして遊ぶ。 ・まとあてドッジボールを楽しむ。
6	12/12(火)	○コーナーでボール遊び (まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) ※チャレンジカード実施 ○まとあてドッジボール②	・コーナーでの遊び方を知り, ボール遊びを楽しむ。 ・気の合う友達と一緒に, ボール遊びを楽しむ。	・チャレンジカードにあるボール遊びのコーナーで体を動かして遊ぶ。 ・気の合う友達とグループを作る。 ・友達と一緒に, まとあてドッジボールを楽しむ。
7	12/14(木) 13ページ参照	○コーナー遊び(2人ペア) (まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) ※チャレンジカード実施 ○まとあてドッジボール③	・ボール遊びのコーナーで, 友達と一緒に様々なボール遊びに挑戦する。 ・友達と一緒に, まとあてドッジボールを楽しむ。	・自分なりに体の動きを調整しながらコーナーでボールを使って遊ぶ。 ・グループで話し合ったり, 役割を決めたりして, まとあてドッジボールを楽しむ。
8	12/19(火) 本時 15～16ページ参照	○コーナー遊び(2人ペア) (まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) ※チャレンジカード実施 ○まとあてドッジボール④	・ボール遊びのコーナーで, 友達と一緒に様々なボール遊びに挑戦する。 ・友達と一緒に力を合わせたり, 競い合ったりして, ボール遊びを楽しむ。	・自分なりに体の動きを調整しながらコーナーでボールを使って遊ぶ。 ・グループで話し合ったり, 役割を決めたりしながら, まとあてドッジボールを楽しむ。
9	1/9(火)～ 1/12(金) 17ページ参照	○コーナー遊び(2人ペア) (まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) ※チャレンジカード実施 ○まとあてドッジボール (蹴る, 転がす) ○アンケート調査②	・ボール遊びのコーナーで, 友達と一緒に様々なボール遊びに挑戦する。 ・友達と一緒に力を合わせたり, 競い合ったりして, ボール遊びを楽しむ。	・友達と一緒に動きを考えたり, 工夫したりして, コーナーでボールを使って遊ぶ。 ・グループで話し合ったり, 役割を決めたりしながら, まとあてドッジボールを楽しむ。 ・幼児への聞き取り調査② ・保護者へのアンケート調査②
10	1/11(木)～ 1/12(金)	○運動能力テスト② ○チャレンジカード集計	・幼児の実態を把握する。	・幼児の運動能力テスト② (投球, 捕球, まりつき)

5 本時までの遊びの様子

【実践3】11月30日(木) 【風船ボールで遊ぼう(まりつき, ボール蹴り)】		★環境構成
○遊びの内容・幼児の姿	◎教師の援助	
<p>○全身を使ってじゃんけんをする。(2人ペア)</p> <p>○風船ボールを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 風船を上に向けて投げ上げて、落とさないように体の動きを調整する様子が見られた。 風船に自分でガムテープを張り、ボールを作ることを楽しむ様子が見られた。 風船ボールを上に向けて投げたり、ついたりして自分なりに動いて遊ぶ姿が見られた。 <p>○振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 風船を使って、自分なりに考えた遊び方を皆の前で発表する子の姿が見られた。 	<p>◎これまでの遊びを振り返ることで、意欲を高める。また、今日の遊びの内容を知らせることで、見通しを持って取り組めるようにする。</p> <p>◎二人ペアが作れない幼児には、声をかけ、他児とかかわりを持てるように仲介したりする。</p> <p>◎風船にガムテープを貼ることに戸惑っている様子が見られたら、手を添えてテープを貼りやすいように援助したり、教師が側でやって見せたりして個に応じて援助をする。</p> <p>◎ボールの操作の仕方を考えて遊びを楽しめるよう、「おもしろい遊び方ないかな？」などと投げかける。</p> <p>◎幼児が考えた動きをクラス全体に紹介し、遊びが広がるようにする。</p> <p>◎遊びを振り返り、楽しかったことや、次もやってみたいことなどを皆の前で発表したり、話し合いをしたりして、次の遊びへ期待が持てるようにする。</p>	<p>(舞台)</p> <p>☆☆☆☆</p> <p>キャッチボール まりつき、 蹴る、打つ</p> <p>★遊びに必要な道具 (まど, カラーコーン)</p> <p>★安全に遊べるように広い空間をとり、コーナーのラインを引いておく。</p> 
◇反省 ◆次回へのつなぎ	◇風船にガムテープを貼る作業で風船が割れたり、上手くテープを貼れないなどの難点があり、時間がかかった。そのため、風船ボールに触れる時間が十分にとれず、じっくり遊べない幼児もいた。作業工程において、ペアで行うなど工夫が必要。 ◇振り返りの際に、自分で考えた遊び方を皆の前で発表したいという幼児が増えたり、「友達の動きを真似したからできた!」と嬉しそうに話すもいて、ボール遊びへの興味が高まってきたように感じた。 ◆二人ペアでの遊びを取り入れ、互いに声をかけたり、相談したりして、友達とかかわりながらキャッチボールなどを楽しめるように言葉かけをする。	
【実践7】12月14日(木) 【コーナー遊び(まどあて, キャッチボール, まりつき, シュート)まどあてドッジボール③】		
○遊びの内容・幼児の姿	◎教師の援助	★環境構成
<p>○今日やってみたいことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 「まりつきを100回できるようにになりたい」などと発表する幼児が多く、遊びへの意欲が感じられた。 <p>○コーナーでボール遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> 積極的にボール遊びに取り組むが、やったことのない種目は避けがちな様子も見られた。 <p>○まどあてドッジボール</p> <ul style="list-style-type: none"> 作戦タイムでは、どうやったら勝てるかを話し合い、自分の考えを出し合う様子が見られた。 	<p>◎これまでの活動を振り返ったり、今日やってみたいことを話し合ったりすることで、意欲が高まるようにする。(ICT活用)</p> <p>◎体を動かすことへ消極的な幼児の気持ちに寄り添いながら、教師がまどあてをする姿を見せたり、一緒にやってみることで、興味を持てるようにする。</p> <p>◎作戦タイムを設け、グループでどうやったら勝てるのか、どんな役割が必要かなどを話し合えるように教師が必要に応じて仲介し、援助する。</p> <p>◎今日の遊びを振り返り、まどあてドッジボールで上手くいかなかった場面を取り上げて、次回はどうかと話し合う。</p> <p>◎一人一人の考えを認め、共感したり、気付いたことを共有したりして、思いを受け止める。</p>	<p>★ボール遊びコーナーの表示をし、ライン引きやボールの準備しておく。</p> <p>★まどあてドッジボールのまどをそれぞれのコートに、4個置く。</p> 
◇反省 ◆次回へのつなぎ	◇コーナーでのボール遊びでは、個別への援助に力を入れて、遊びへの参加に消極的な幼児へ声をかけ、側と一緒にやってみた。表情は硬いが、自分でボールを掴み、まどあてをすることができた。 ◆まどあてドッジボールは、作戦タイムをつくり、話し合いの場を設けた。初めての話し合いの場だったので、話し合いが進まずにトラブルになるグループも見られた。教師がグループの話し合いに入り仲立ちをしたが、解決するまで時間がかかった。次回は、話し合う時に気をつけること(他のグループの作戦を聞かない、友達が話しているときは最後まで聞くなど)を確認する。	

6 検証保育(本時)

(1) 自ら体を動かすことを楽しむ幼児の姿を捉える指標

検証保育を行う際に、教師が幼児の姿をどのように捉えるかという具体的な視点を持って保育を行うことにする。そこで、幼児が「自ら体を動かして遊ぶようになる過程」(5ページ参照)を踏まえ、幼児の姿を4段階で捉える。

A 意欲的に体を動かし、動きを調整したり、工夫したりする。	B 自ら十分に体を動かし、進んで運動しようとする。	C 興味を示し、やってみようとする。	D 傍観する。 かかわろうとしない。
・意欲的に遊びに参加し、体の動きを調整したり、遊び方を工夫したりする。 ・友達とルールを考えたり、思いを出し合ったりして遊ぶことを楽しむ。	・進んで環境にかかわったり、遊びに参加したりして、体を動かして遊ぶ。 ・友達の動きをまねしたり、様々な動きに挑戦したりする。	・教師や友達に誘われて遊びに参加する。 ・友達の動きに興味を示し、一緒に遊ぶことを楽しむ。	・初めての遊びや活動に戸惑いがある。 ・他児の様子を傍観している。 ・体を動かすことへ苦手意識があり、やろうとしない。

(2) 具体的な援助について

「自ら体を動かすことを楽しむ幼児の姿を捉える指標」を踏まえ、ボール遊びのコーナーにおける幼児の姿に応じて、教師の具体的な援助をまとめ、個への援助をしていきたいと考える。

幼児の姿 遊びの コーナー	A 意欲的に体を動かし、動きを調整したり、工夫したりする。	B 自ら十分に体を動かし、進んで運動しようとする。	C 興味を示し、やってみようとする。	D 傍観する。 かかわろうとしない。
まとあて	◎まととの距離を遠くしたり、友達と競争したりして遊ぶよう提案し、遊びが広がるようにする。	◎まととの距離を自分の力に合った距離にして、挑戦してみることを提案し、工夫して遊ぶことができるようにする。	◎前に出す足がまとに向いていることや、まとを狙って投げることなどのコツを伝え、教師が側でやってみせる。 ◎友達の動きをまねてみるよう言葉かけをし、興味を持てるようにする。	◎教師や友達がまとあてをしている所を見せたり、手を添えて補助したりしながら一緒にやってみる。 ◎やわらかいボールや、大きいボールなど種類を変えることを提案し、興味を持てるようにする。
キャッチボール	◎投げる他にも、転がしたり、蹴ったりしてキャッチボールができることを知らせ、自分で工夫して遊ぶことができるようにする。 ◎友達と一緒に、遊び方を考えてみるよう提案し、遊びが広がるよう援助する。	◎手を使うだけではなく、他にも足やおなか、おしりでもボールを止める動きがあることを知らせ、挑戦してみるよう声かけをする。 ◎他児の動きをまねてやってみたり、自分で考えて挑戦したりするよう声かけをする。	◎自分に向かってくるボールに対して体の正面を向けること、胸の前で両手でキャッチすることなど捕る動作のポイントを具体まことに知らせ、教師が側で一緒にやってみる。 ◎他児へ仲介し、一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにする。	◎教師が積極的に誘い、友達の中に入って遊べるよう仲介し、一緒にキャッチボールをする。 ◎友達とかかわることを避けてしまう子に対して、他児の遊ぶ様子を見せたり、友達と遊ぶ楽しさを伝えて、興味を持てるようにする。
シュート	◎つま先を使ったキックや、足の甲を使ったキックなど自分で試して遊ぶよう声かけをする。 ◎友達と競い合って遊ぶことや他児に動きを教えることを提案し、友達とかかわりを持てるようにする。	◎シュートをする位置を遠くしたり、助走を付けて蹴ったりするなど工夫して遊ぶことを提案し、挑戦してみるよう声かけをする。 ◎友達と競い合って遊ぶことを提案し、友達とかかわりを持てるようにする。	◎ボールに対して、まっすぐに体を向け、足の甲で蹴ることなど蹴るポイントを具体的に知らせる。 ◎蹴ることに慣れていない子に対して、やわらかいボールに変えてやってみることで、できた喜びを味わえるようにする。	◎教師がやってみせたり、友達が遊んでいる様子を側で見せることで、興味を持てるようにする。 ◎幼児と相談しながら、やわらかいボールに変えるなど、やってみようという気持ちを持てるように配慮する。
まりつき	◎リズムにあわせて、ボールについて遊ぶことを提案し、挑戦してみるよう声かけをする。 (あんたがたどこさ、おうまはみんな) ◎友達同士で、数を教え合ったり、競い合ったりして遊ぶよう声かけをする。	◎自分の目標を決めて、何回できるか挑戦したり、友達と競い合って遊ぶよう提案したりすることで、遊びが広がるようにする。	◎ボールをつくことに慣れていない子に対して、教師が後ろから手を添えて、一緒にやってみる。 ◎1対1で、教師や友達と交代ずつボールについて、練習することで、できた喜びを味わえるようにする。	◎ボールをつくことに慣れていない幼児へ、新聞紙ボールに輪ゴムをつけた練習用ボールを準備し、練習してみるよう声かけをする。 ◎教師や友達がまりつきをしている所を見せたり、手を添えて補助したりしながら一緒にやってみる。

(3) ボール遊びのチャレンジカードについて

検証保育のボール遊びの中で、「投げる」、「捕る」、「蹴る」、「つく」の4つのボール操作のチャレンジカードを活用し、幼児の運動能力の発達段階に応じた個別の援助を行っていく。幼児は、カードの項目にあるボール遊びに挑戦し、達成したら自分で達成したレベルの色のシールを貼る。1日でできなかった項目は、普段の遊びの中で行うことにし、遊びが継続してできるよう配慮する。

また、集団遊びでは、ゲーム後の感想を見取るため、顔の表情シール（にこにこ顔、かなしい顔）を活用する。「楽しい・頑張った」という感想は、にこにこ顔シール、「困った・楽しくない」という感想は悲しい顔シールで表すことにする。そして、振り返りに教師が確認し、幼児の実態把握や個別への援助に生かしたいと考える（図10）。

ぼーるあそび チャレンジカード				
ぞろくみ なまえ:	12がつ 7にち (ちく)		12がつ 12にち (か)	
チャレンジ すること				
【なげる】 まとあて	レベル1 (あか)	レベル2 (あお)	レベル1 (あか)	レベル2 (あお)
【とる】 ぼーるきやち	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)
【ける】 しゅーと	レベル1 (あか)	レベル2 (あお)	レベル1 (あか)	レベル2 (あお)
【つく】 まりつき	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)
【つく】 まりつき	5~10かい (あか)	10~30かい (あお)	5~10かい (あか)	10~30かい (あお)
	30よりおおい (びかびか)	30よりおおい (びかびか)	30よりおおい (びかびか)	30よりおおい (びかびか)
ぞろくみ なまえ:	ぼーるあそびのなまえ:			
チャレンジ すること	12がつ 14にち (ちく)	12がつ 19にち (か)	1がつ 9にち (か)	
【なげる】 まとあて	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)
【とる】 ぼーる きやち	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)
【ける】 しゅーと	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)
【つく】 まりつき	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)
【つく】 まりつき	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)
【つく】 まりつき	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)	レベル3 (びかびか)
【まとあて(げーむ)】 たのしい・がんばった	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)	レベル1 (あか)
【まとあて(げーむ)】 こまった・たのしくない	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)	レベル2 (あお)

図10 ボール遊びのチャレンジカード

(4) ホールの環境構成について

① ボール遊びコーナーの環境構成

- ★舞台上にまとあてのまとを並べておく。(4個)
- ★ボール遊びのコーナーごとにテープでラインを引く。レベルごとにカラーテープを引く。
- ★用具を取り出しやすいように種類ごとに箱に分けて置く。

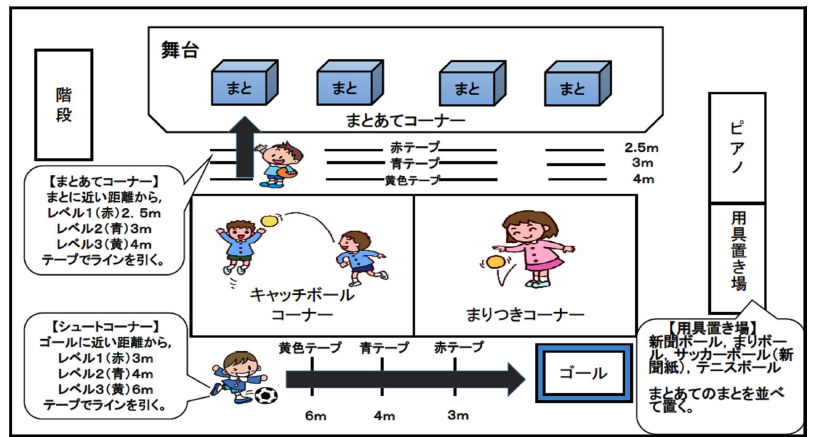


図11 コーナー遊びの環境構成

② まとあてドッジボールの環境構成

【まとあてドッジボールのルール】

- ① 1グループ9～10人の3グループに分かれる。
- ② 2つの陣地に分かれて、それぞれのグループのコートにまとを6個置く。
- ③ 1人2個ずつ新聞ボールを持ち、「始め」の合図で、相手のまとをねらって投げる。(黄色のラインから)
- ④ 1分間行い、倒したまとの数が多きグループの勝ち。

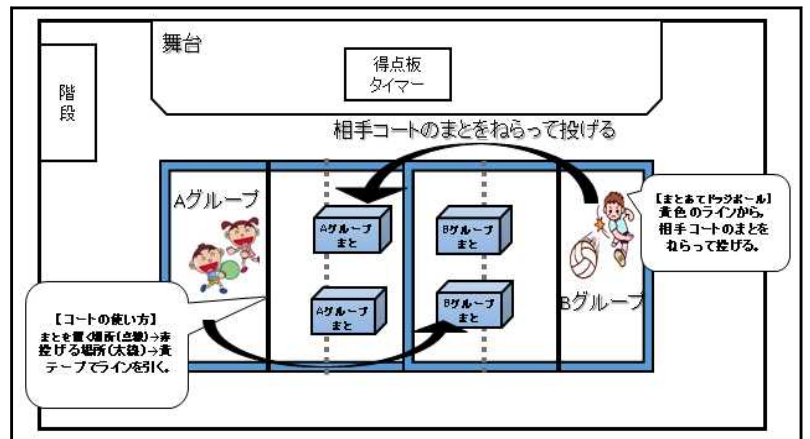


図12 まとあてドッジボールの環境構成

(5) 本時の保育

検証保育 『ボール遊び』

保育指導案

平成29年12月19日(火) 9:00～10:15

そら組 男児13名 女児15名 計28名

教諭 大城 美奈子

幼児の姿	・ボール遊びに興味を持ち、チャレンジカードにあるボール遊びに意欲的に挑戦する様子が見られた。また、教師や友達に、「まりつきが30回もできるようになったよ」「まとあて楽しい」などと、できるようになった嬉しさや楽しさを伝え、遊びを楽しんでいる様子が伺えた。一方で、体を動かすことに苦手意識があり、遊びへの参加を渋る幼児も見受けられる。	ねらい	・ボール遊びのコーナーで、友達と一緒に様々なボール遊びに挑戦する。
	・まとあてドッジボールは、自分達でグループを決め、遊びのルールを考えたことで、意欲的に取り組む様子が見られた。		・友達と一緒に力を合わせた、競い合ったりして、ボール遊びを楽しむ。
		内容	・自分なりに体の動きを調整しながらコーナーでボールを使って遊ぶ。(チャレンジカード：投げる、捕る、つく、蹴る)
			・グループで話し合ったり、役割を決めたりしながら、まとあてドッジボールを楽しむ。
時間	○予想される幼児の姿	◎教師の援助	★環境構成
9:00	○ホールで集まる ・手遊びなどをして、全員が集まるのを待つ。	◎排泄や水分補給を済ませたり、ジャンパーを脱いで動きやすいように衣服を調節したりするよう声かけを行う。	(2Fホール)
	○予定・約束の話し合い ・今日どんなことをして遊びたいか話し合う。 ・遊び方の約束について確認したり、話し合ったりする。 ・体操をする。	◎これまでの遊びを振り返ったり、今日挑戦してみたいことを話し合ったりすることで、意欲が高まるようにする。 ◎安全な遊び方や友達と仲良く遊ぶにはどうしたら良いかななどの約束について再確認する。	★幼児がすぐに遊びに取り組みやすいように始まる前に環境構成をする。
			★体を動かしやすいように友達との間を空けて座るよう声かけをする。
			★幼児がこれまでの遊びを振り返り、今日やってみようことをイメージしやすいように、写真や動画を用いる。(テレビ準備)

<p>9 : 10</p> <p>(20分)</p>	<p>○コーナーでボール遊び</p> <ul style="list-style-type: none"> ・チャレンジカードにあるボール遊びをペアで進める。 ・まとあて遊び(投げる) ・キャッチボール(投げる、捕る) ・シュート! (蹴る) ・まりつき! (つく) ・上手くできなくて戸惑う様子が見られる。 ・チャレンジカードが終わったら、ペアの幼児と一緒にカードにシールを貼る。 ・チャレンジカードが早く終わって、飽きてしまう幼児が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎これから行うことを具体的に伝え、見通しをもって活動に参加できるように配慮する。 ◎友達とのかかわりが自分から持てない様子が見られたら、教師が積極的に誘ったり、他児へ仲介したりして、一緒に遊ぶ楽しさを味わえるようにする。 ◎個に応じてボール操作のポイントを教えたり、補助をしたりするなどして援助する。 ◎チャレンジカードの遊びに飽きている様子が見られたら、ボールの操作の仕方を考えて遊びを楽しめるよう、「面白い遊び方ないかな?」などと投げかけたり、遊び方を提案したりする。 ◎次回も続きができることを伝え、次の遊びに移れるようにする。 	<p><チャレンジカードのコーナー></p> <p>※図11参照</p> <p>【まとあて】 まと(段ボール4個)、新聞紙ボール小30個 投げるライン(赤青黄)</p> <p>【キャッチボール】 まりボール15個、コーナーライン(緑)</p> <p>【シュート】 新聞紙ボール大3個、ゴール、蹴るライン(赤青黄)</p> <p>【まりつき】 まりボール15個、コーナーライン(青)</p>
<p>9 : 30</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・片付けをする。 ・集まって、話しを聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎幼児が考えた動きをクラス全体に紹介し、遊びが広がるようにする。 ◎一人ひとりの良さを認めていくことで、遊びへの意欲や満足感を味わえるようにする。 	 <p>★片付けやすいようにボールや道具の種類ごとにかごを用意し、絵表示を付けておく。</p>
<p>9 : 40</p> <p>(10分)</p>	<p>○まとあてドッジボール</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルールの確認をする。 ・グループで作戦を立てたり、役割を話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎皆が楽しく安全にゲームができるよう、事前に注意事項や約束について再確認する。 ◎3つのグループに分かれ、各グループで話し合う時間を設ける。 	<p><まとあてドッジボール></p> <p>※図12参照</p>
<p>9 : 50</p> <p>(10分)</p>	<p>・グループ対抗のまとあてドッジボール</p> <p>・3グループ総当たり戦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゲームで勝ったことを喜んだり、負けて悔しがったりする様子が見られる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎作戦や役割を決める姿を見守り、上手い出来ない所は仲立ちして、意見をまとめたり、他の方法を提案するなどして援助する。 ◎審判をしながら幼児の様子を見守り、励ましたり、ルールを守って遊べるよう言葉かけしたりする。 ◎勝負の楽しさが分かるよう、勝った嬉しさや負けた悔しさを共感したり、頑張っている姿を認めたして次回への意欲につながるような声かけをする。 	<p>【準備する物】 段ボールのまと12個、コートのライン(青、緑) コート内ライン(赤、黄) 新聞紙ボール小60個(1人2個ずつ持つ) 得点板(ホワイトボード)、タイマー ビブス30枚</p>
<p>10 : 00</p>	 <ul style="list-style-type: none"> ・ボールを片付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎勝負の楽しさが分かるよう、勝った嬉しさや負けた悔しさを共感したり、頑張っている姿を認めたして次回への意欲につながるような声かけをする。 	<p>★安全に遊ぶように広い空間をとり、使わない物は片付けておく。</p>
<p>10 : 05</p>	<p>○集まり・片づけ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しかったことや、気付いたこと、困ったことなどを発表する。 ・次回やってみたいことを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎今日の遊びを振り返り、楽しかったことや、次もやってみたいことなどを皆の前で発表したり、話し合いをしたりして、次回の遊びへ期待を持てるようにする。 ◎一人ひとりの考えを認め、共感したり、気付いたことを共有したりするなど個々の思いを受け止める。 	<p>★自分のチームのまとを赤のラインに置く。</p> <p>★コート中央から3m離れた所に黄色のラインを引き、幼児がボールを投げるラインとする。</p>
<p>10 : 15</p>	 <ul style="list-style-type: none"> ・使った道具を片付ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ◎安全に留意し、幼児と一緒に道具の片付けをする。 	<p>★使った道具やボールは種類ごとに分別して、かごに入れる。</p> <p>★片付ける場所が分かりやすいように絵表示をつけておく。</p>
<p>評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児は、自ら体を動かして遊ぶことを楽しんでたか。 ・幼児は、自分なりの目標を持ち、できるようになるために考えたり工夫したりして遊んでいたか。 ・幼児は、友達との話し合いに参加し、まとあてドッジボールを楽しんでいたか。 		

7 本時後の遊びの様子

<p>【実践9】 1月9日(火)～ 1月12日(金)</p>	<p>【コーナー遊び(2人ペア)(まとあて, キャッチボール, まりつき, シュート) まとあてドッジボール⑤(転がす, 蹴る), まとあてドッジボール⑥(投げる, 転がす, 蹴る)】</p>					
<p>○遊びの内容・幼児の姿</p>	<p>◎教師の援助</p>	<p>★環境構成</p>				
<p>○前回までの振り返り ○コーナーでボール遊び ・「先生、まりつきが100回もできたよ」、「ピカピカシールを初めてもらった」などと教師に嬉しそうに報告しに来る姿が見られた。 ・ペアと一緒にキャッチボールをする際に、「投げるよ」「いいよ」とかけ声をかけながら遊ぶ姿が見られた。</p> <p>○まとあてドッジボール⑤ ・ボールを「転がす」「蹴る」ことを楽しみ、ボールがまとに当たるのを喜ぶ姿が見られた。</p> <p>○まとあてドッジボール⑥ ・まとをねらって当てることへ意識が見られ、ボールの位置や体の動かし方を調整しようとする幼児も見られた。</p> <p>○振り返りをする。 ・自分なりに、これまでできなかったけどできるようになるには練習が必要だと気付く幼児や、友達に教えてもらってできたことと喜ぶ幼児の感想があった。</p>	<p>◎前回までの遊びの様子を写真を見せながら話し、今日はどんなことに挑戦したいか自分なりに目標を持つるように問いかけることで、幼児の意見を引き出していく。 ◎皆が楽しく安全にゲームを進められるよう、事前に注意事項や約束について再確認する。 ◎幼児の遊びの様子を見ながら、個別に体の動かし方やボールを投げる位置を様々に試してみるよう声かけをしたり、側で教師がやってみせたりして援助する。 ◎幼児の意見を聞きながら遊びのルールを決めていき、分かりにくいところは、実際に教師がやって見せることで共通理解できるように配慮する。 ◎作戦タイムで、話しが上手くまとまらない場面が見られたら、教師が必要に応じて間に入り、話をまとめるなど援助する。 ◎今日の遊びを振り返り、楽しかったことや、遊びのルールを工夫したい所などを皆の前で発表したり、話し合いをしたりして、ルールを皆で決めることで遊びが楽しくなるようにする。 ◎一人一人の頑張ったことや、できるようになって嬉しいことを聞き、認める。遊びを工夫することで楽しくなることを伝え、継続して遊べるようにする。</p>	<p>★前もって環境構成をし、幼児がすぐに遊びに取り組めるようにする。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>(舞台)</p> <p>☆☆☆☆</p> <table border="1" style="margin: auto;"> <tr> <td style="padding: 2px;">キャッチ ボール</td> <td style="padding: 2px;">まりつき</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 2px;">シュート</td> </tr> </table> </div> <p>★遊びに必要な道具 (まと, カラーコーン, ゴール)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>(舞台)</p>  </div> <p>△まとを中央の線の上に置く</p> <div style="border: 2px solid blue; border-radius: 15px; padding: 5px;"> <p>【ルールの変更点】</p> <p>まとあてドッジボール⑤ ・ボールを「転がす」か「蹴る」かのどちらかをしてまとを倒す。</p> <p>まとあてドッジボール⑥ ・ボールを「投げる」、「転がす」、「蹴る」の動作をしてまとを倒す。 ・「攻めるグループ」と「守るグループ」に分かれて、守るグループはまとにボールが当たらないように、まとの前で守る。</p> </div>	キャッチ ボール	まりつき	シュート	
キャッチ ボール	まりつき					
シュート						
<p>◇反省</p>	<p>◇チャレンジカードを継続して行ってきたことで、幼児が「まりつきが100回より多くできるようになったよ」「遠いところからシュートできた」などと積極的に発表し、挑戦してできた達成感を味わっている様子が見られた。まとあてドッジボールは、まりボールで「転がす」「蹴る」の動作を取り入れたり、幼児と話し合ってルールを工夫したりして進めてきた。最終日は、「攻めるグループ」と「守るグループ」でゲームを行ったことで、体の動きを調整しながら遊ぶ様子が見られた。今後も遊びが継続するよう環境構成や援助を行っていきたい。</p>					

VIII 研究の考察

1 作業仮説(1)の検証

多様な動きを経験できるボール遊びに関する年間指導計画を作成し、幼児が遊びに興味関心を持てるような環境構成の工夫や、チャレンジカードを活用した個に応じた援助を行うことで、体を動かす楽しさを味わえるであろう。

(1) ボール遊びに関する年間指導計画について

① 手だて

発達段階に応じたボール遊びの意義について理論を深め、園生活や遊びにおける年

間指導計画に基づき、ボール遊びに関する年間指導計画を作成し、実践を行った。

② 結果

ア 検証保育(保育実践3)より

幼児の発達や実態に合わせて、風船ボール遊びなど、どの幼児も楽しめそうな遊びから取り入れた。そうしたことで、幼児が遊びに興味を示し、しだいに自分なりにボールの遊び方を工夫しながら進んで遊ぶようになった(図13)。

また、検証後の幼児の感想からもボールで遊ぶ楽しさを味わっている様子が伺えた(表8)。



図13 風船ボールでバレーボールに挑戦

表8 幼児の感想

- ・風船にガムテープを貼るのが難しかったけど、ボールになって嬉しかったです。
- ・まりつきをして楽しかったです。
- ・友達とバレーボールをして楽しかったです。

イ 検証保育(保育実践7)より

年間指導計画のIV期では、グループの友達と一つの目標に向かって取り組む楽しさや、競い合って遊ぶ楽しさを味わうことがねらいにあることを踏まえ、集団遊びへの展開を行った。

クラス全体で遊びのルールを話し合う場面や、グループでの作戦タイムでは、自分の考えを話したり、友達の意見を聞いたりして、イメージを共有しながら遊びを進める姿が見られた(図14)。



図14 グループでの作戦タイム

さらに、6月と1月に行った幼児への聞き取りアンケートで、「ボール遊びが好き」と答える幼児が71%に増えた(図15)。その理由として、「友達と一緒にボール遊びをすることが楽しい」という回答が多く見られた(表9)。

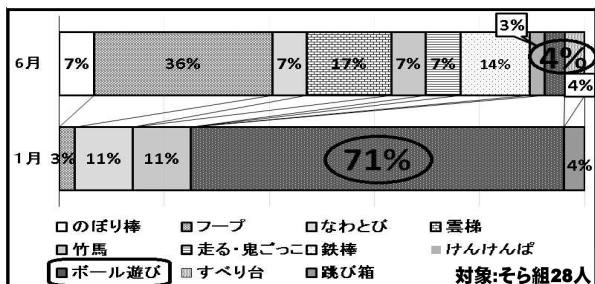


図15 「どんな運動遊びが好きですか？」

表9 幼児への聞き取りアンケートの回答

- ・友達とまとあてドッジボールをして、勝つと嬉しいから。
- ・皆で遊ぶのが楽しいから。
- ・友達とボール当て鬼をするのが楽しい。

③ 考察

ボール遊びの年間指導計画を作成し、教師が幼児の発達に見通しを持って遊びを取り入れ、個々の実態を捉えながら声かけなどの援助を行ったことで、幼児がボール遊びを通して多様な動きを経験し、自分なりにやってみよう動きを考えて遊びを楽しむことができた。また、個から集団遊びへと展開し、友達と協力する場を設定したことで、グループでの仲間意識が芽生え、友達と一緒に体を動かす楽しさを味わえた。そして、友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わったことで、ボール遊びに対して好感を持つ幼児が増えたと思われる。

(2) 遊びに興味を持てるような環境構成

① 手だて

幼児が遊びに興味関心を持てるように、様々な大きさのボールを用意した。さらに、園生活の中でも進んでボールに触れられるような環境を設定した。

② 結果

園生活の中でボールに親しめるように、天井からボールをつり下げて「おはよう・さよならボール」として設置したことで、登園や降園の際に「おはよう」「さよなら」の文字が書かれたボールに手でタッチし、毎日喜んでボールに触れる姿が見られた(図16)。



図16 登園時「おはようボール」にタッチ

③ 考察

園生活や好きな遊びをする中で、ボールに興味を持ち、進んでかかわることができるような環境構成を行ったことで、自らボールに親しみ、触れたり、遊び方を工夫したりするようになったと思われる。

また、様々な大きさのボールを用意し、そ

れらを使って遊びを展開したことで、あまり遊びに関心を示さなかった幼児も、準備や片付けを進んで行うなど少しずつ関心を寄せる姿が見られるようになったと思われる。

(3) チャレンジカードを活用した個への援助

① 手だて

「投げる」、「捕る」、「蹴る」、「つく」の4つのボール操作のチャレンジカードを活用し、幼児の運動能力の発達段階に応じた個別の援助を行った。

② 結果

ボール遊びのチャレンジカードを使った取り組みの回数を重ねるごとに、ボールの操作が上達した幼児の姿が多く見られるようになった。さらに、体の動きをボールの動きに合わせて調整する様子や、カードの達成項目が増えた幼児も見られた。

今回、6月と1月に行った幼児への聞き取りアンケート（図17）でも、「体を動かすことが好き」と答える幼児が93%に増え、その理由から、多くの幼児が体を動かして遊ぶ楽しさを味わっていることが分かった（表10）。

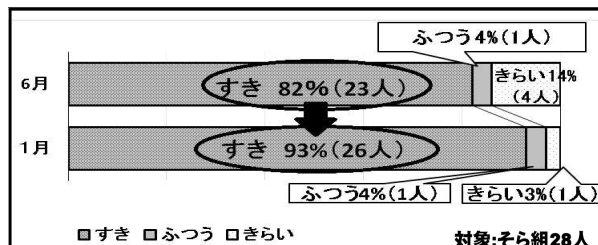


図17 「体を動かして遊ぶことは好きですか？」

表10 幼児の回答

【体を動かして遊ぶことが好きと答えた理由】

- ・楽しいから。
- ・まりつきは、何回でも続けられるから楽しい。
- ・友達と一緒に遊ぶと楽しいから。
- ・みんなでボール遊びをして楽しい。
- ・友達とキャッチボールできるようになって嬉しい。またやりたい。

【ふつう・嫌いと答えた理由】

- ・運動すると、疲れるから。

また、チャレンジカードから幼児の実態や課題を明確にし、スモールステップを取り入れながら個に応じた援助を行ったことで、幼児が練習するうちにできるようになった喜びを教師と共有し、より自発的にボール遊びに取り組むようになった。さらに、新しい技に

挑戦する姿も見られた（表11）。

表11 チャレンジカードに取り組むA児の変容

A児は進級児で、園生活の中で何事にも意欲的に取り組み、自分の思いを素直に表現することができる。一方、運動においては、経験不足のため体の動かし方にぎこちなさが見られる場面もあり、クラスでの運動遊びの際には自信のなさそうな表情をすることが多く見られた。チャレンジカードの取り組みでは、初日はカードにある項目の遊び方が理解できず、他児の様子を傍観している姿が見られた。

そこで教師は、A児を積極的に遊びに誘い、一つ一つ遊び方や体の動かし方を具体的に伝えたり、手を添えて補助したりするなどして、個別の援助を行ってきた。体の動かし方のコツを掴むと、「まりつきを3回できるように頑張る」と、自分なりの目標を持って、練習する姿が見られるようになった。

しだいに、ボール遊びに楽しみを見つけ、教師が声をかけなくても自ら進んで取り組み、「先生、まりつきが20回できたよ」などと、喜びを報告しに来るようになった。また、遊びの振り返りの場面では、皆の前で、「〇〇さんと一緒にキャッチボールができたのが楽しかったです」と積極的に発表し、周りに認められたことで、その後は自信を持って他の運動遊びにも取り組むようになってきた。チャレンジカードの集計をしたところ、4項目のうち3つの項目において、A児のボール操作の評価が3段階のうち事前のレベル1から、事後はレベル2以上に上がっていた。「捕る」の項目においては、引き続き援助が必要である。



チャレンジカード活用後に、幼児から感想の聞き取りを行うと、できるようになったことを自信を持って発表する幼児が多く、発表を聞いている幼児も一緒に喜びを共有する姿が見られた（表12）。

表12 チャレンジカード活用後の幼児の感想

- ・まりつきが220回できるようになって、嬉しかったです。もっとできるようになりたいです。
- ・〇〇さんと一緒にキャッチボールをして、ボールが落ちたけど、やって楽しかったです。
- ・まりつきする時に、フープの中でまりつきをしたら、10回できるようになりました。

③ 考察

チャレンジカードを活用し、個の実態に応じた援助を行うことで、幼児が経験を重ねる中で自分の力でできた喜びを味わい、ボール遊びへの意欲の向上に繋がったと思われる。また、幼児への聞き取りアンケートから、友達と一緒に取り組んだことで遊びへの意欲が高まり、「楽

しい」という充実感を味わうことができた
と考えられる。

体を動かして遊ぶことが「ふつう」や「嫌
い」と返答する幼児への手だてとして、幼
児の興味を引くような内容を遊びに取り入
れ、教師の声かけなどのかかわりを工夫す
る必要があると感じた。また、今回は検証
保育の中でチャレンジカードを活用し、幼
児の変容を見ることができたが、より幼児
の多様な動きの発達を促すには4月から年
間指導計画に沿ってボール遊びを取り入れ
展開を行っていくことが必要だと感じた。

2 作業仮説(2)の検証

ボールの特性を踏まえ、個から集団遊びへ
と展開し、友達と一緒に遊びを進める楽しさ
を味わえるような援助を行うことで、自ら体
を動かして遊ぶようになるであろう。

(1) 個から集団への遊びの展開について

① 手だて

集団遊びとして、グループ対抗のまとあ
てドッジボールを取り入れ、クラス全体で
遊びのルールを考えたり、それぞれのグル
ープで作戦を立てたりするなど話し合いの
場を作るようにした。

② 結果

遊びの振り返りに、困ったことや、気付
いたことを発表する場を設けると、「まと
あてのまとは、グループで準備したい」「作
戦を他のグループに聞かれないように、グ
ループの集合場所を決めると良い」などの
意見がでてきた。そこで、幼児と相談しな
がらルールや約束を決めたことで、進んで
準備や片付けを行い、ルールを守って遊ば
うとする姿が見られた。

グループでの作戦タイムでは、最初は上
手く話がまとまらずトラブルになる場面も
見られたが、経験を重ねるうちに、自分達
で声をかけ合って集合し、話し合う姿が見
られるようになった。また、勝った嬉しさ
や負けた悔しさをグループの友達と共有し
「またやりたい」と意欲的な姿が見られる

ようになった。遊んだ後に幼児の感想を聞く
ため、顔の表情シール（にこにこ顔、かなし
い顔）を活用したところ、最終日の実践9で
は「楽しい」と答える幼児が増えた（図18）。

また、表13のような感想があった。

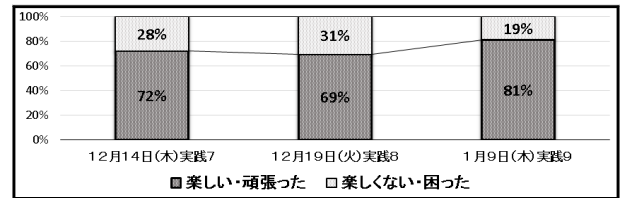


図18 カードの顔の表情シールの集計結果

表13 幼児の感想

・まとにボールが当たって楽しかった。
・みんなやっけて勝てたから、嬉しかった。
・負けたけど、次は勝ちたい。
・負けたから、楽しくなかった。
・前は負けたけど、今日はみんなで頑張ったから勝
てた。嬉しかった。

③ 考察

クラスでの話し合いや、グループでの作戦
タイムなど、友達と一緒に遊びを進める中
で互いの思いを出し合う場面を大切にしたこ
とで、幼児が友達と協力して遊ぶことを楽し
み達成感や充実感を味わえたと思われる。また、
幼児の感想より、集団で遊ぶ楽しさを味わ
ったことで、自発的に友達と遊びに取り組
む姿が見られるようになったと考える。

今回、まとあてドッジボールは幼児の学
びの連続性を考慮し、小学校1年生の体育
におけるゲームを参考にして取り入れたが、
幼児全員がルールを理解することが難しく、
簡易化する必要があった。そのため、実践
8では、ルールに難しさを感じている幼児
や、ゲーム中にトラブルになる様子が見ら
れ、「楽しくない」と感じる幼児が31%と
なったと考えられる。その後、皆で楽し
めるルールへ変更し、共通理解しながら
進めたことで「楽しい」と感じる幼児
が増えたと思われる。

(2) 友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わうための援助

① 手だて

チャレンジカードの取り組みでは、一緒
に行うペアを決めて、他児とかかわりな
がら遊びを楽しめるようにした。

② 結果

チャレンジカードの取り組みでは、ペアを自分達で決め、互いに相手の遊ぶ様子を見合えるような手だてを行ったことで、「一緒にやろう」などと声をかけ合い、相手の良いところを真似てみたり、教え合ったりする姿が見られた。また、園生活の中でもペアで互いに誘い合ってボール遊びをするなど、かかわりが多く見られるようになった(図19)。



図19 ペアでカードにシールを貼ろう

チャレンジカード活用後、幼児にペアで取り組むことについて感想を聞いたところ、表14のように、積極的に発表する幼児が多かったことから、友達と一緒に遊びを進める楽しさを味わっている様子が伺えた。

表14 幼児の感想

- ・○○さんとキャッチボールをして、楽しかったです。
- ・○○さんと一緒にまりつきの勝負をして、楽しかったです。
- ・シムートができなかったけど、○○さんに教えてもらったからできるようになりました。

さらに、幼児の姿を「自ら体を動かすことを楽しむことを捉える指標」(13ページ参照)をもとに捉え、事前と事後で比較すると92%の幼児が進んで体を動かして遊ぶことを楽しむようになったことが分かった(図20)。

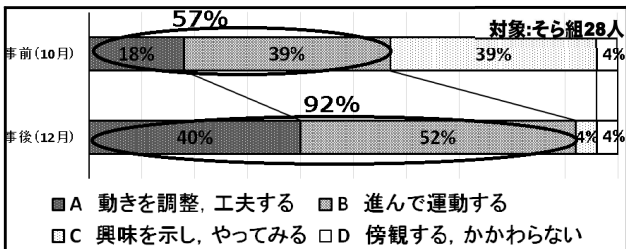


図20 幼児の変容

③ 考察

チャレンジカードを取り組んだ初日は、ボール遊びの各コーナーでの遊び方を教師が説明しながら、個人で自分のペースで取り組んだ。そのため、幼児の中には自分ができない

種目は挑戦せず、好きな種目を繰り返し行う姿も見られた。その後ペアで取り組んだことで友達に刺激を受け、互いに声をかけ合ったり励まし合ったりして、苦手な種目にも挑戦しようとする幼児が増えてきたと思われる。さらに、友達と一緒にボール遊びを楽しんだことで、友達の動きを真似してみたり、新たに動きを考えて試したりする姿が見られるようになり、しだいに自発的に遊ぶ幼児が増えてきたと思われる。

3 本研究を通して

10月と1月に行った運動能力テストでは、評定3以上の人数が増え、前回より結果が伸びた幼児も多かった(図21, 22, 23)。

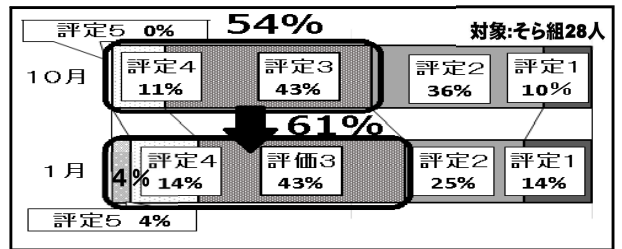


図21 運動能力テスト結果(投球)

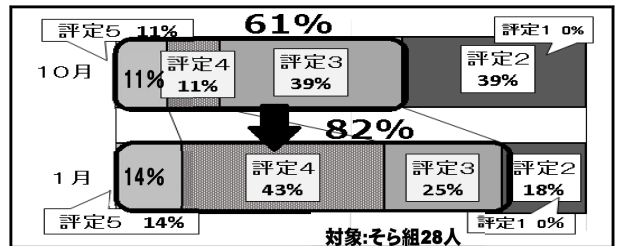


図22 運動能力テスト結果(捕球)

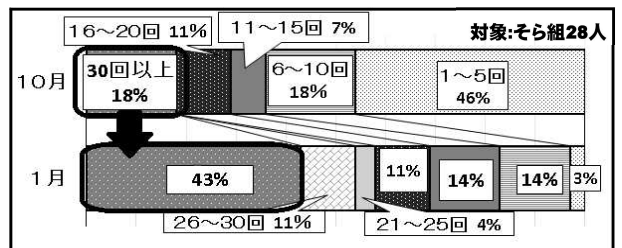


図23 運動能力テスト結果(まりつき)

本研究から分かったことは、ボール遊びを通して、幼児の心身の発達が促され、多様な動きの獲得やボールをコントロールする力などが育まれるということである。さらに、ボール遊びは幼児の興味を引く遊びであり、個から集団遊びへと展開していくことで、友達と体を動かす楽しさを味わうことができ、運動への意欲を高めることに対して有効であることが分かった。

IX 研究の成果と課題

1 成果

- (1) ボール遊びに関する年間指導計画を作成し、発達段階や幼児の実態を踏まえて遊びを導入・展開していったことで、幼児が遊びに興味を持ち、多様な動きを経験することができた。
- (2) 幼児の興味や遊びの内容に合わせて環境構成を行ったことで、幼児が自発的に遊ぶようになった。
- (3) ボール遊びのチャレンジカードを活用して、幼児一人一人の実態を踏まえながら個に応じた援助を行ったことで、幼児が自分の力でできたことへの達成感を味わい、さらに自分なりの目標を持ち、意欲的に遊ぶようになった。
- (4) 個から集団へと遊びを展開し、友達と遊ぶ楽しさを味わえるような援助を行ったことで、幼児同士で励まし合ったり、互いの考えを出し合ったりして、友達と一緒に進んで遊びに取り組むようになった。

2 課題

- (1) ボール遊びに関する年間指導計画は、保育実践の反省を踏まえ、見直し改善を行う。
- (2) 室内だけでなく、戸外でもボール遊びを年間を通して継続的に取り組めるよう環境構成や遊びの内容の工夫を行う。
- (3) 小学校の体育に関連させ、学びの連続性を踏まえて、集団の中でより友達との対話が深まる遊びの内容を工夫する。

おわりに

近年、幼児期における運動の機会の減少、運動能力の低下が指摘されています。本研究では、園生活の中で「自ら体を動かすことを楽しむ幼児の育成」をテーマとし、「ボール遊び」に焦点を当て研究を進めてきました。

研究を進めるにあたり、「学びの連続性」に着目し、幼児期から小学校就学時の接続期における遊び・援助にはどういった工夫が必要なのか理論を深めながら実践を行ってきました。

検証保育では、教材を工夫し、幼児の実態に合わせて援助を行うことで幼児の遊びが広がり、好奇心を持って遊ぶ姿が見られるようになり、嬉しく思いました。また、幼児が友達や教師とのかかわりの中で互いの成長を喜び合う場面では、教師が幼児に寄り添い、良さを認め、援助することの重要性を改めて感じました。半年間の研究で学んだ理論や実践を今後の保育に生かし、さらに深めていきたいと思えます。

研究期間中、ご多忙の中、励まし指導して下さいました浦添市教育委員会の友利愛子指導主事、浦添幼稚園の眞境名太樹副園長、入所前の事前研修より丁寧にご指導下さいました本研究所の長濱京子所長をはじめ研究所の職員の皆様、浦添市教育委員会の諸先生方に深く感謝申し上げます。

最後に、快く研究所へ送り出して下さいました仲西幼稚園の島尻順子園長、いつも笑顔で励まして下さった先生方、半年間の研究を共に支え合ってきた研究員に感謝申し上げます。ありがとうございました。

【主な参考・引用文献】

- | | |
|---------------------------------------------------------------------------|-------|
| ・幼稚園教育要領（平成29年告示）文部科学省 フレーベル館 | 2017年 |
| ・幼稚園教育要領解説（平成20年改訂）文部科学省 フレーベル館 | 2008年 |
| ・幼児期運動指針 文部科学省 | 2012年 |
| ・幼児の運動能力調査 文部科学省 | 2012年 |
| ・小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省 | 2017年 |
| ・「アクティブ・ラーニングの三つの視点を踏まえた、幼児教育における学びの過程（5歳児後半の時期）のイメージ」平成28年教育課程部会幼児教育部資料8 | 2016年 |
| ・「幼児期の運動遊びの研究」新里享敏 沖縄女子短期大学紀要第11号 | 1995年 |
| ・「幼児のボール遊びの教育的意義とその指導方法」岡本卓夫 お茶の水大学 日本幼稚園協会 | 1958年 |
| ・すこやかな子どもの心と体を育む運動遊び（第2版）井上勝子 建帛社 | 2010年 |
| ・保育と幼児期の運動遊び 岩崎洋子 萌文書林 | 2008年 |
| ・東京都日野市コアカリキュラム作成委員会資料 | 2006年 |
| ・仲西幼稚園教育計画 | 2017年 |
| ・ひろみちお兄さんの運動あそび 佐藤弘道 世界文化社 | 2016年 |
| ・心と体をつむぐ体育ボール運動小学校1～6年 細江文利 小学館 | 2006年 |